

省力化及びコスト削減に向けた給餌方法の検討Ⅱ  
～富士の介における間欠給餌の効果について～

加地奈々

省力化及びコスト削減を目的に、富士の介を週5日給餌と週3日給餌の異なる給餌間隔で飽食給餌により飼育し、飼育成績を比較した。140gサイズに達するまでの飼料効率は週5日給餌と週3日給餌で同等であったが、成長は週3日給餌の方が約4週間遅くなった。週3日給餌では日間摂餌率が週5日給餌に比べ上昇したものの、摂餌日数の減少を補える程の摂餌量の増加とならなかったため、成長の遅れにつながったものと考えられた。

富士の介の週3日の飽食給餌は養成期間が長くなるため早期育成が求められる養魚場においては週5日の飽食給餌の方が適しているが、早期育成を優先しない場合は、週3日給餌の導入は給餌作業の負担軽減や労働コストの削減などにつながる給餌方法といえる。

富士の介のスマルト化とそれに伴う特性の変化

平塚 匡・加地奈々・青柳敏裕

富士の介のスマルト化の詳細把握と、それに伴う各種特性（鱗の剥離し易さ、IHNVに対する感受性）の変化の有無について検討した。富士の介は標準体長15cm前後でスマルト個体が出現し、ニジマス（17cm前後）とマスノスケ（10cm前後）の中間の傾向を示した。鱗の剥離し易さはマスノスケで最も剥がれ易く、次いで富士の介、ニジマスとなり、3魚種ともスマルト化に伴い鱗が剥がれ易くなる傾向がみられた。富士の介パー及びスマルト個体のIHNVに対する感受性の差異を感染実験により評価した結果、スマルトはパーよりIHNVへの感受性が高い可能性が示唆された。

富士の介はニジマスに比べスマルト化し易く、それに伴い一部特性も変化する可能性が示されたことから、当該時期の選別や取り扱い等については細心の注意が必要と考えられた。